様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３４３１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０１７６８

研究課題名（和文）父親の育児参加準備性・態度に関する自己評価尺度の開発

研究課題名（英文）Development of a Seif-Assessment Scale of the father's Readiness for Childcare

研究代表者
デッカー　清美（DECKER, KIYOMI）

明治国際医療大学・看護学部・教授

研究者番号：８０７０８４９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　父親950名に本調査の協力を依頼し、質問紙の内容性と妥当性を検討した。回収した質問紙は286部（回収率30.1%）であり、このうち有効回答271部を分析対象とした。対象者である父親の平均年齢は34.3歳であった。
　上記質問紙調査の結果を分析したところ、「父親の子育て準備性自己評価尺度」は因子分析により、4因子が抽出されて14項目となった。4因子の累積寄与率は51.14%、第1因子の寄与率は23.48%であった。4因子のそれぞれは、①家族への好意感情、②消極的感情、③意識の変化、④知識の習得であった。尺度全体のクロンバックα係数は0.75、下位尺度では0.62～0.83であった。

研究成果の概要（英文）：950 fathers whose partner was pregnant with their first child and who commute to outpatient clinics such as hospitals and health centers in the Kanto and Kansai areas and attend classes for mothers were asked to cooperate in the survey. 286 questionnaires were returned by mail (a collection ratio of 30.1%), out of which 271 valid responses were analyzed. The average age of the targeted father was 34.3 years. Analysis of the results of the above questionnaire survey revealed that four factors were extracted from the Self-Assessment Scale of the Father’s Readiness for Childcare through factor analysis and 14 items were obtained. The cumulative contribution ratio for the five factors was 51.14% and the contribution factor of the first factor was 23.48%. The four factors were, (1) a favorable feeling for the family, (2) a negative feeling, (3) self-awareness, and (4) learning. The cronbach's α coefficient for the entire scale was 0.75, and 0.62 to 0.83 for the subscale.

研究分野：母性看護学領域

キーワード：父親の準備性　子育て　尺度開発

父親の子育て準備性自己評価尺度の開発

【序論】

Ⅰ．研究の背景

父親は子どもとの接触や育児に関わる過程で父親意識を育んでいくと言われている。育児とは、子どもの生命を守り、心身の発達を助け、健康の増進をはかり、社会に適応できるように育てることで、そこには父親の持つ育児役割意識が大きな影響を及ぼす。少子化や幼児虐待等が増加している日本において、父親に対する子育て支援は喫緊の課題である。「父親の子育て準備性」は、夫婦関係、社会背景や職場環境が影響し、子育てについて仲間と語り合うネットワーク作りや子育てを促進するための施策やプログラムなどによって父親としての自覚が高められ準備されていく。そこで、父親の子育てに向けた準備がどの程度形成されているのかを測定するアセスメントするツールとして「父親の子育て準備性自己評価尺度」を開発することは、父親の子育て準備状態を把握することを可能にし、「父親の子育て」を促進するための施策や教育プログラムの一助となる。

Ⅱ．研究課題

本研究の具体的課題は以下の 4 点である。

1. 国内外の父親の子育て準備性について明らかにする。
2. 父親の子育て準備性の構成概念を明らかにする。
3. 父親の子育て準備性の自己評価尺度を作成する。
4. 父親の子育て準備性の自己評価尺度の信頼性、妥当性、有用性を検証する。

【目的】

本研究の目的は、父親の養育者としての子育て準備性を測定する尺度、「父親の子育て準備性自己評価尺度」を作成し、その信頼性と妥当性を検討することである。

【方法】

1. 文献検討を通じて、インタビューガイドを作成し 7 組のカップル計 14 名を対象に、妊娠期の父親の子育て準備状態について半構造化面接を実施した。面接調査の結果と関連文献や先行所見の参照から、「父親の子育て準備性自己評価尺度」の項目案を抽出した。その上で、看護学研究者と検討しながら、文献検討および父親へのインタビュー調査の結果、父親の子育て準備性を整えていくには、①妊娠への思い、②お子さんの心音・超音波の写真類、胎動に対する感情、③母親学級または両親学級、④親になる、⑤子育てへの思い、⑥子どもへの思い、⑦親の役割、⑧夫婦関係について、⑨立会分娩についてというの 9 つの構成概念があり、親としての準備性や子育てへの関与に関する内容を含むことが明らかとなった。

2.「父親の子育て準備性」を表していると思われる質問項目を、構成概念ごとに作成した。舟島（2006、p.9）は、「質問項目は概念個々、カテゴリ個々を網羅するように作成する。測定したい現象はその現象から創出された概念すべてにより表される」と述べていた。この事をふまえ質問項目は、父親の子育て準備性に関する文献や第 3 章の父親への面接調査

のデータを参考にしながら、曖昧な表現を避け平易な表現、具体的かつ簡潔な表現になるように留意し作成した。その結果、44 項目を設定した。測定方法は、5 段階の選択肢で測定しようとする現象の質的な差異を、ある程度の段階にわたり量化するための比較的簡便な測定方法であるリッカート尺度とした。選択肢は、「全くそう思わない、あまりそう思わない、どちらともいえない、ややそう思う、非常にそう思う」の 5 段階である。それぞれに、1 点（最小値）から 5 点（最大値）の点数を与え、それらを合計して尺度得点とし、得点が高いほど父親の子育て準備性が高くなるように配点した。

3. 父親 100 名に上記質問紙を用いてパイロットスタディを実施、質問紙の内容性と妥当性を検討した。その結果、100 名中、57 名の回答（回収率 57%）があり、そのうち有効回答が 56（有効回答率 98%）であった。無効としたのは、質問項目に対し記入漏れのあったものであった。その結果、4 因子 24 項目が抽出され、専門家会議を経て質問項目の内容的妥当性を確保した。

4. 統計解析ソフト SPSS Ver.24 を使用し分析を行った。項目分析として、①信頼性ではα係数の変化の検討、②I-T 相関（項目全体）相関分析、③項目間相関係数の算出、④探索的因子分析および確認的因子分析、⑤尺度の信頼性（内的整合性）と妥当性（構成概念妥当性、基準関連妥当性、内容的妥当性）を検討した。

5. 倫理的配慮

調査を実施するにあたり、対象者が所属する病院やクリニックの院長および看護部長、保健センターの施設管理者や母子衛生研究会の管理者に文書または口頭で説明を行い、同意書をもって研究協力施設とした。研究協力の同意が得られた研究対象者に、文書または口頭で研究の説明を行い、無記名の自記式質問調査用紙を配布し回答後、返信用封筒（料金受取人払い）を用い個別の投函を依頼した。回答をもって同意が得られたものとした。研究対象者には、研究参加が任意であることと匿名性を保証し、回答の途中で参加を中止しても構わないことを研究協力依頼書に明記した。回収したデータは、個人が特定されないよう配慮するとともに、データが外部に流出しないよう鍵のかかるロッカー等で厳重に管理した。本研究は、国際医療福祉大学の研究倫理安全委員会の承認を得てから実施した。

【結果】

質問紙の統計結果を看護研究者間で検討し、質問紙を修正し本調査で用いる質問紙を完成させ、父親 950 名に本調査の協力を依頼し、質問紙の内容性と妥当性を検討した。回収した質問紙は 286 部（回収率 30.1%）であり、このうち有効回答 271 部を分析対象とした。対象者である父親の平均年齢は 34.3 歳であった。

上記質問紙調査の結果を分析したところ、「父親の子育て準備性自己評価尺度」は因子分析により、4 因子が抽出されて 14 項目となった。14 項目の因子相関係数は 0.06～0.50 であった。固有値 1 以上で、累積寄与率は 51.14%であった。

4 因子構造における下位尺度の内容と命名を検討した。精神科看護学分野の研究者 3 名および母性看護学分野研究者 1 名で検討した。結果、第 1 因子は、子どもや妻への家族への思いに関する感情があり好意的感情に関する項目が構成されていたので「家族への好意勘定」と命名した。第 2 因子は、親になるということに消極的な感情が構成されていたので、「消極的感情」と命名した。第 3 因子は、子どもができて親になるという意識の変化

に関する項目で構成されていたので、「意識の変化」と命名した。第 4 因子は、母親学級や両親学級など出産前教室での学習に関する項目で構成されていたので、「知識の習得」と命名した。

尺度活用可能性を検討するため、構成概念間の関係性について、仮設モデルにも基づき因果モデルを構築し、共分散分析を実施した。その結果、カイ 2 乗は 166.42、P<0.001、GFI=0.92、AGFI=0.88、CFI=0.92、RMSEA=0.07 であった。RMSEA は推奨値とされる 0.05 を上回ったが 0.1 以下であることから、モデルのデータ適合度の一部課題はあるが、本結果は許容範囲であると判断し、これを最終モデルとした。

4 因子のそれぞれは、①家族への好意感情、②消極的感情、③意識の変化、④知識の習得であった。尺度全体のクロンバックα係数は 0.75、下位尺度では 0.62～0.83 であった。基準関連妥当性については、育児への積極性との相関を検討したところ、消極的感情との間で有意な負の相関（r=－0.363、p<0.01）が認められた。他の 3 因子では、家族への好意感情(r=0.523)、意識の変化(r=0.414)、知識の習得(r=0.303)ですべて有意な正の相関(p>0.01)が認められた。

【考察】

父親の子育て準備性自己評価尺度は因子を構成する質問項目の内容や因子間の相関関係によって、①家族への好意感情、②消極的感情、③意識の変化、④知識の習得という 5 つの因子から構成されると考えた。尺度全体のα係数が 0.75 であることから信頼性は確認され、また、内容的妥当性、構成概念妥当性と基準関連妥当性を検証し尺度の妥当性を高めるよう努めたことでこの尺度の妥当性が確認されたと言えよう。父親の子育てへの関わりを促進するアセスメントのツールとして、その準備状態を測定し把握できる尺度として有用であると考える。

【結論】

本研究で作成した父親の子育て準備性を測定する「父親の子育て準備性自己評価尺度」は、その信頼性と妥当性が支持され、父親の子育て支援として父親の子育て準備状態を把握することで、父親の子育てへの関わりが促進され諸医療施設や一般的に広く用いられることを期待する。